No.89
2022. 6.10

地球の木

地球上のすべての人たちと共に生きたい

CONTENTS

■これからの地球の木が目指すもの ミッションステートメント 1
■絵本や図書館を通じたラオスの子どもたちの
教育環境向上プログラム ..... 2〜3
■ネパール現地報告 4
■ラオス現地報告 5
■カンボジア現地報告 6
■クラフト生産者紹介 第1回 FAIR WEAVE(カンボジア) 6
■対話カフェ〜みんなで話そう！多文化共生(第2回・第3回報告) 7
■ウクライナへの軍事侵攻に反対する声明文 8
■インフォメーション／活動日誌 8
■編集後記 8

これからの地球の木が目指すもの
ミッションステートメント

2021年、地球の木は設立30周年を迎えました。30周年を節目として、これまでの活動をふりかえると同時に、これからの社会変化を見据えて、地球の木の活動指針とすべく「ミッションステートメント」を作成しました。ミッションステートメントとは、組織の価値観や社会的使命を、行動指針・方針として具体化したものを指します。ミッション(Mission)は「使命」、ステートメント(Statement)は「表明」という意味です。

昨今では、企業や国際NGOの多くがホームページ等でミッションステートメントを提示しています。地球の木もそうしたトレンドにのったかのようですが、この数年、海外支援事業では、地球の木がなんのために海外支援を行うのかという根本的な視点からプログラムの見直しを図ってきたことや、気候変動や難民・移民の増大など30年前とは変化している地球社会の現状にあわせて、今後の地球の木がすべきことを明確に記す必要を感じました。

地球の木ミッションステートメント

ビジョン：目指す社会

地球上すべての人々が、自然と共存し、一人ひとりの人格や固有の文化を尊重し、人が人らしくあたりまえに生きていくために、互いに助け合う社会。

ミッション：使命

地球の木は、主にアジアの国々で、社会的に弱い立場におかれた人たちが、自らの権利を知り、未来を自分たちの力で切り開いていけるように、教育や地域づくりのあり方を共に考え、対等な立場で必要な支援をおこないます。同時に私たちは、国内においても、多様な人々や市民団体と連携し、真の豊かさを育む教育活動や多文化共生の社会づくりに携わります。

地球の木のミッションステートメントは「ビジョン(目指す社会)」と「ミッション(使命)」の2つの部分で構成しています。まず「ビジョン」については、定款に書かれた文章に「一人ひとりの人格や固有の文化を尊重し」「互いに助け合う社会」を加えました。これは、海外の支援地においても国内においても多様な文化が共存する中で、分裂や対立をするのではなく、違いを認めて尊重しあい、必要な時に誰もが互いに助け合える、そうした社会を創っていきたいとの願いをこめています。

「ミッション」については、さらに2部構成とし、初めに海外支援について、次に国内活動について記しました。これまでも地球の木は開発教育を主とした国内活動を国際協力の一環として重視してきましたが、さらに一歩踏み込んで、従来の海外での支援経験を活かし、国内でも多様な市民団体と連携しながら「教育と地域づくり」を行うことを明記しました。国内外で、単なる教育機会の提供を超えた「真の豊かさを育む教育」をつくること、さらに、これまでも住民参加による開発を海外で支援してきた経験を活かして、国内でも多様な文化を持つ人々と共に地域社会を形成していくことを掲げました。

5年後、10年後には社会の変化に合わせて見直しが必要になることでしょう。しかしながら、今後まずは5年を目指して、このミッションステートメントを指針に、その実現を目指していきます。

(理事長　磯野 昌子)

30周年イベントを終え、みんなで一瞬マスクを外す

■発行 特定非営利活動法人 地球の木 理事会 ■発行責任者 磯野昌子 ■編集 会報作成チーム ■事務局 〒231-0032 横浜市中区不老町1-3-3フェニックス関内2F
■TEL 045-228-1575 ■FAX 045-228-1578 ■E-Mail:chikyunoki@e-tree.jp ■http://e-tree.jp/

NPO法人 ラオスのこども 提供

新プログラム

絵本や図書館を通じたラオスの子どもたちの教育環境向上プログラム

―本と出会い、自分の世界を広げよう！―

地球の木が創設以来、支援活動を続けてきたラオス。現在までのプログラムに加えて、2022年度はラオスでの新プログラムを行います。長年ラオスで図書教育活動を行っている特定非営利活動法人「ラオスのこども Action with Lao Children」(以下ALC)の読書環境向上のためのプログラム支援です。

ラオスでは、ラオス語の本や絵本に出会う機会は限定されています。私が民間の立場でラオスに滞在していた頃(2016～2019)、首都のビエンチャンでも本屋は数軒。本屋にはラオス語の本もありましたが、主に外国人向けの外国語(英語・フランス語)の本でした。スーパーやコンビニの片隅で販売していることもありますが、子どもたちが絵本に触れられる機会は主に学校図書館でした。

日本では早ければ0歳児から絵本に触れ、情操教育や想像力を育む絵本を簡単に手に取ることが出来ますが、ラオスの図書環境は厳しいものでした。

カウンターパートALCの活動

地球の木で、今回活動を応援するカウンターパートのALCは、ラオスで子どもたちが本に出会える学校図書館を現在までにラオス全土で340ヵ所設立してきました。設立時には、基礎研修、図書館担当教員の育成を実施、持続可能な自主的運営、地域教育行政との連携なども積極的に模索し、現在は、学校教育とリンクした学び・情報の拠点にするよう活動を続けています。

現ALC代表のチャンタソン・インタヴォンさんが留学生として来日し、日本の絵本に触れ、ラオスにも絵本・図書教育を届けたいと活動を始めたのがALCの始まりです。チャンタソンさんは、日本で母親となり、日本の絵本にラオス語訳を貼付し、ラオスに届ける活動を始めました。日本各地の人々との幅広い交流に支えられ、次第にラオス社会からも認知され2002年に法人格も取得。「子どもたちが自らの力を伸ばし、人生を主体的に選択できる」ことを目標に活動を続け、①図書館支援、②ラオス語の書籍出版、③子どもセンター(子どもの居場所づくり)の3つの柱で活動している団体です。

コロナ禍で学校閉鎖が長かったラオスで、今後を見据え最も必要な活動を考えた時、学校に行かずとも「自ら学ぶ力をつける」ことが出来るように図書環境支援の継続は大切です。

図書館がある学校はラオス全土で現在約1,000校。割合は10校に1校程度です。支援している図書館でALCスタッフたちが出会った子どもは、出稼ぎに出ている母親に会えない寂しさを「本で慰めてもらった」と話し、中学生は「お話しを読むのは楽しいし、本を通して世界が広がったように感じます」と本との出会いを喜んでいるとのことです。

NPO法人 ラオスのこども 提供

「ぼくにも読めるよ」ラオス語訳をつけた日本の絵本

地球の木の支援活動は

ラオスに根付き、自ら学ぶ力がつく図書教育の促進を続ける、彼らの活動を止めないように地球の木は2022年度、現地支援活動を行います。また、日本国内では仲間を増やし、図書の大切さを共有し、共にラオスの子どもたちへ本や声を届ける活動を行います。

地球の木の現地支援

2022年度の現地支援は主に以下の２つになります。

①図書館を学びに活用するための教員研修

ALCが図書館を設立する時には、図書の分類・図書館の利用方法等の基礎研修を行ってきました。今後は、さらに調べ学習などにも活かされるように教員や生徒ボランティアへの応用研修を行います。地域にも開かれている学校図書館ですが、この応用研修により、学校に行くことができなかった人も学び続けられる場所になっていくのではないかと考え、学校図書館が「読書をする場」だけでなく、生徒、および地域に開かれた「学習・情報センター」としての役割も果たせるようになることを目標としています。

現在、すでに行われている別地域での研修では、参加した先生方が地域の学校間でSNSなどを通じ、効果的なポスター作りなどの情報共有が自主的に始まっているとのことです。

地球の木が支援する本年度の研修はビエンチャン都の中等教育学校２校で９～12月に行われる予定です。

②質の高い図書の出版と図書活用ワークショップ

◆絵本『ぼくはどこへいくの』の増刷

年月の経った学校図書館の中には、新しい本の補充が十分でないところが多くあります。子どもたちがいつも新鮮に「本」に出会うためには、図書の補充が必要です。新しい本に出会うことは、図書を利用する子どもや地域住民の読書環境も向上させ、「子どもが本に親しむこと」「読書の習慣をつけること」「読書を通じて、生活に活かされる学びと自ら学習する力をつけること」につながります。子どもたちの「もっと本を読みたい」に応えるべく、ALCはラオスのことについて書かれた良質なラオス語の絵本を出版しています。

2004年、2012年に絵本作家、やべみつのりさんの協力を得て、ALCが出版した環境絵本『ぼくはどこへいくの』は、ラオスの生活では欠かせないバナナを主人公に、変化するラオスの生活での環境教育を考えさせる本として多くの図書館で活用されてきました。2022年度はさらに多くの子どもたちに活用されるように増刷し、地球の木はその中の1,000部を支援します。

◆みんなで考えを深めるワークショップ！

『ぼくはどこへいくの』を読んで、バナナを活用することの環境的なメリットを再認識するワークショップは、地域開発の一環として環境意識啓発活動にもラオス各地で活用されています。

絵本『ぼくはどこへいくの』

やべさんのほのぼのとした味わいのある絵で描かれたおはなしは、バナナとビニール袋が主人公。バナナはそのまま食べるだけでなく、お皿にしたり、祭壇の飾りつけにしたりされ、やがて自然に還る。ラオスの生活では欠かせないものです。一方、ビニール袋は自然には還ることがないプラスチック。便利だけれど環境への影響を知って使ってほしいとのメッセージを子どもたちに伝えます。

地球の木の国内活動

絵本が身近にないラオスの子どもたちが良質な絵本に触れる機会を増やすこと、図書の役割を再認識すること、そして、ラオスの子どもたちへの支援活動を共に支える仲間を増やしていくことを目標とし活動します。

まずは、日本の絵本にラオス語訳を貼付し、ラオスに送る活動を行います。ご自宅にある下記５冊の絵本の提供、および貼付作業のボランティアを募集しています。ぜひ、ご協力をお願いいたします。

お子さんも一緒に

翻訳シート貼付ボランティア募集

本を集めた後は、ラオス語翻訳シートを貼り、ラオスの図書館に送ります。みなさんの手で翻訳シートを貼付し、サインを入れて、ラオスの子ども達に届けませんか？ 貼付しながら、ラオスのことも学べます。
詳細はホームページをご覧ください。または地球の木にお問合せください。

５冊の絵本を集めています！

日本の絵本にラオス語翻訳シートを貼付して、ラオスの子どもたちに届けよう！
お家で眠っている本はありませんか？ぜひ、地球の木にご寄付ください。

「ぐりとぐら」作：なかがわりえこ　絵：おおむらゆりこ（福音館書店）
「モチモチの木」作：斎藤隆介　絵：滝平次郎（岩崎書店）
「かいじゅうたちのいるところ」作：モーリス・センダック（冨山房）
「わたしのワンピース」作・絵：にしまきかやこ（こぐま社）
「スーホの白い馬」再話：大塚勇三　絵：赤羽 末吉（福音館書店）

（ラオス図書チーム：相馬 淳子）

やっぱり教育はエッセンシャル！

「子どもに優しい教育をめざすと言いながら、子どもたちの状況を理解せずに指導していました」

「研修を受けて、まず自分の行動を変える必要があることを学びました。教師は生徒の尊厳を尊重しなければなりません」

「生徒がどんな不安を持っているか、なぜドロップアウトするのか解りました。学んだことを他の先生たちと共有し、実践します」

これは4月に地球の木のパートナーNGO・SAGUNが教師を対象に実施した「子どものための心理社会カウンセリング研修」参加者の声です。

ネパール・インドラサロワール農村自治体（以下IRM）を拠点に昨年９月開始した、教育の質の向上をめざす新規プログラムは、23校（生徒数2,845名）の校長先生や学校運営委員会、行政など、すべての関係者との個別の話し合いを経て、キックオフしました。心身の問題に対処する保健の担当を含む先生たちや、保護者の要望を入れた、今回の教師研修は、「今までにこんな研修は受けたことがない！」「人生最高の研修だった」と大きな反響を呼びました。

IRMに限らず、ネパール農村地域の学校には様々な不安に苦しむ子どもたちがいます。転換性障害という、無意識裡の抑圧との闘いから身体的症状を生じる障害に悩む子どもたち、ドロップアウトする子どもたちも多くいます。しかし、先生方は、生徒たちの問題の核心に迫ることができず、対処できない状況でした。そんな先生や保護者のニーズに応えた教師研修は、すぐに実践できる処方箋を提供したようです。専門家集団SAGUNの実力を見る出来事でした。

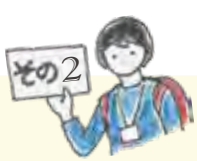
教師研修と共に、高校生たちを対象とした論文作成研修も２回に分けて行われました。昨年度終了したロシでの幸せ分かち合いムーブメント・プログラムで成果を上げた作文トレーニングに倣い、IRMでも少数民族が声を上げることができるようにこの研修を行い、地方情報誌を発行します。SAGUNがめざすのは、社会の不条理や不公正をしっかりと言葉で表現し、行動に移すことのできるリーダーの養成です。ロシ地域では、SAGUNの地域ファシリテーターとして人々から信頼の厚い女性リーダー、ムク・マヤ・タマンさんが、ロシ農村自治体マンガルタール区の代表候補として選挙に出馬しました。残念ながら、27票の僅差で願いは叶えられませんでしたが、ネパール会議派から推薦を受けたことは、ムクさんが地域のリーダーであると認められた証。SAGUN事務局長のカマル・フヤルさんは「今回の選挙を機に地域で政治家・社会活動家としての地位を築いたことが、ムクさんの勝利です。私たちは、これからも彼女が地域のリーダーとして成長するのを支えていきます。ムクさんには明るい未来があります。何よりも彼女は社会に貢献したいという強い意志を持っていますから」と肯定的です。

IRMの未来を担う先生たち（教師研修で）

私たちがIRMで蒔き始めた小さな種の中からも、きっと地域を引っ張るような人材が現れることでしょう。「教育がエッセンシャル」と言った、最初のプロジェクトの現地パートナー、ニルマラさんの言葉が思い出されます。

（ネパールチーム　乳井 京子）

幸せを分かち合った☆スタディツアー その2



スタディツアーは、マンガルタール村で約14年間行ってきた「幸せわかち合いムーブメント」に大きな役割を果たしました。ツアーの体験は、参加者たちの後の人生にどんな影響を与えたのでしょうか。感想文からいくつか拾ってみました。

Kさん：「それぞれ立場は違うが私たちは同じ『こころ』を持った人間である。私たち一人ひとりが人間としての『良心』に気づき、生き切ること、生きる意味を改めて考えることのできたツアーであった」

Tさん：「伝え継がれる家庭料理の奥深さを探りながら、現代日本社会におけるおもてなし、家庭の団欒についても、考えさせられるきっかけとなった」

Sさん：「村の人々はテレビやコンピューターはないけれども、人間本来のコミュニケーションをとても楽しんでいる。自分の生活を振り返り寂しさを感じた。これからはもっと人に優しく、そして興味を持とう。互いに助け合う生活こそ豊かな社会を創ることができるのだろう」

開発学の専攻を目指す大学生Hさんはツアーで考えたことがそのモチベーションを向上させてくれたと言います。「『開発』とは、単に産業化や都市化を目指すことでも、市場へのアクセスを促進するだけのものでもありません。今回、開発の現場に触れて実感したことは、むしろ地域の伝統と誇りを守りつつ、コミュニティーとその構成員の生活にいかに改善をもたらすかということに重点が置かれるべきだということです」

それぞれの思いがきっと今につながっていることでしょう。

（ネパールチーム　丸谷 士都子）

ラオス、セコン県での新規プロジェクト

日本国際ボランティアセンター（JVC）ラオス駐在員　山室 良平

いつもご支援ありがとうございます。今回はJVCが近く開始するセコン県でのプロジェクトについてお伝えします。

サワンナケート県でのプロジェクトが一定の成果を挙げて昨年終了した後、セコン県での2年間のプロジェクトを立案しました。ラマーム郡およびタテン郡の10村、約1,600世帯を対象に、住民が暮らしの基盤である土地や森、川などの共有資源を持続的に管理・利用し、安定した暮らしを営めることを目指します。

セコン県の位置

セコン県はラオス南東部に位置し、4郡に人口およそ13万人が住み、少数民族がその多くを占めています。住民のほとんどが農業を生業としつつ、自然の恵みに依拠した暮らしを営んでいますが、一方でゴムなどのプランテーションが広がり、住民によるキャッサバやコーヒーなどの換金作物の栽培が至るところで見られます。同県では2000年から2020年までの20年間で15%、117,000ha（東京ドーム25,000個分）の森林被覆面積が減少したと言います。

本プロジェクトでは、コミュニティー林や魚保護地区などの共有資源管理のルールづくりをサポートし、また村人の暮らしの権利を守るため法律研修を行います。住民からは「いつの間にか共有の森がなくなってしまった」という声が聞こえてきますが、そこには住民が目の前の必要からキャッサバなどの換金作物栽培をひろげ、やむを得ず共有資源を取り崩している実情があります。この課題に対し、資源管理の実践を支えるだけでなく、住民自身が村の共有資源の現状を把握し、その価値について認識を共有することが肝心です。村人たちが日々の生活のなかで立ち止まり、JVCとともに村の歴史などを振り返り、共有資源の大切さを改めて認識する。このことこそが、住民主体の活動の出発点となります。

セコン県農村でのキャッサバ収穫の様子

とはいえ、ラオス農村には長い目で暮らしのことを考えない人ばかりではなく、むしろ豊かな自然に基づく奪わない暮らしが残っています。キノコや魚などをとり尽くさず守り、奪い合わずに分け合う暮らしは豊かだと感じます。

日本でも同様の習慣は見られますが、近年は自分で野菜をつくるにも誰でも無償で使える土地はなく、山菜採りにしても厳密には土地所有者に許可が必要になります。ラオスの囲い込まれていない土地や自然、「みなが使ってもよい」という習慣を守ることが求められています。

途上国の人々が「現金が欲しい」「先進国のような物質的に豊かなライフスタイルを送りたい」と思うのも当然の人情で、一方的に否定はできません。とはいえその背景にある資源を使い尽くす開発を推し進めた結果、奪い合いの紛争や、気候変動によるものも含め、災害が頻発しています。このままでは人類の暮らしが立ち行かなくなるかもしれません。

本プロジェクトは、そのような「人情」にある意味で挑戦するものです。困難かもしれませんが、村人たちをサポートしつつ、彼らから学び、地球規模で営まれる環境を損ない、資源を奪うような経済やライフスタイルを問い、変えることにつながるよう努めます。

トークイベント

ラオス発！ 持続可能な奪わない／奪われない暮らし

こんなタイトルで、地球の木は、2月20日のオンラインイベント「SDGｓよこはまCITY冬」に参加しました。コロナで帰国中のJVCラオス現地駐在員の山室良平さんに来ていただき、写真を見せてもらいながらラオスの村の話を聞きました。森や川から自然の恵みをもらって自給自足の暮らしを続けるラオスの農村。しかし外国資本の開発で変わりつつあるのも現実です。

前半は、「ラオス式奪わない暮らし」がどういうものなのか、山室さんにインタビューしながら話を進めました。「とるのは自分たちの食べる分だけにして、とり尽くさない」「干したり燻製にしたりして保存食に」など。後半は、日本式「奪わない暮らし」がどんな風にできるか、日々心掛けていることはどんなことか、17名の参加者にグループに分かれて話し合い発表してもらいました。毎日の暮らしを見つめ直すきっかけになったかも。　（ラオスチーム　斎藤 和子）

心身を癒やし、自立できるまで寄り添う

前回の会報誌では、コロナ禍でカンボジア女性緊急救済センター（CWCC）が行政の依頼で受け入れたサバイバー（被害者）の中で、今まで減少傾向にあった人身売買の被害者が84名（内未成年者８名）に増え、その原因として海外で不法就労していた人たちが強制送還されためであることをお伝えしました。今回は、彼女たちがシェルターで具体的にどんなサポートを受けているのか、またCWCCと行政との連携についてお知らせいたします。

シェルターでは心理カウンセリングと職業訓練を行っています。心理カウンセリングには個人とグループの２つがあり、個人カウンセリングでは、サバイバーを温かく迎え入れ信頼関係を作り、心を解放することを目的としています。グループカウンセリングでは、サバイバー同士が一緒に会う機会を提供し、お互いを知り、家族のように感じられるようにします。その結果、必要な時に助け合い、友情を築き、希望に満ちた強い気持ちを持つことができます。職業訓練ではお土産品（小物作り）やパン作りに仲間と一緒に参加することで、ここでの生活を楽しいものにします。

2021年度に受け入れた84名全員がそれぞれの家庭に帰ったとのこと。しかし、コロナ禍でもあり、まだ自立して生活できるようになったわけではなく、家庭に帰った後も１年間は社会福祉省とCWCCが協力し、全ての被害者の生活状況や精神状態を把握し、カウンセリングを行います。状況が改善されれば、サポートを終了します。改善されない場合は、担当者が再度ケースを評価し、必要な支援を提供します。

職業訓練のための小物づくり

カンボジアではシェルターを運営する団体と行政とは緊密な連携ができていて、情報共有や協力が積極的に行われています。また医療サービスの支援、出生証明書など法的に必要な書類、学校に通い学習を続けるための推薦状など、被害者を支援するために必要なニーズについてもCWCCと連携しています。　（カンボジアチーム　成瀬 悦子）

クラフト生産者紹介　その1

FAIR WEAVE（カンボジア）

チョムナップさん（前列左）と一緒に働く仲間たち

地球の木「幸せわかちあいクラフト」で販売しているFAIR WEAVEの天然染織のストールやタオル、ランチョンマットなどは人気の商品です。デザイナーでもある創設者のチョムナップさんから、メッセージが届きました。

地球の木の皆様

こんにちは。

FAIR WEAVEはカンボジアの伝統染織技術で教育や雇用の格差をなくそうと2013年に設立した団体です。私はフランスの開発援助組織で、絹商品強化プロジェクトのチームリーダーとして、カンボジア北部のプノンスロックで活動していました。そこで直面したのは、貧困女性の教育機会が制限され、就職機会も得られないという現状でした。また、教育や雇用の機会に格差があるカンボジアの農村地域では、危険な環境で働く女性もいます。この状況を変えたいと、地元の資源を使い伝統染織事業を通して、地方であっても女性たちがサステイナブルな仕事ができる環境を提供するよう団体を立ち上げました。FAIR WEAVEではこれらの地域にいる女性たちにしっかりと賃金を支払えるような雇用を目指しています。その目的のためにも、継続した村の織物職人を支援する資金集めが課題です。しかし、コロナの影響で、プノンペンとシェムリアップのお店を閉め、国内販売はほぼ無くなり、海外への出荷は7割減になり、厳しい現状になっています。

地球の木からの継続的なご注文に感謝しています。FAIR WEAVEで働く多くの女性たちの喜びが増えるように、更なる注文に期待しています。地球の木を通して購入いただけることが、一緒に働く彼女たちにはとても大切です。　FAIR WEAVE 代表　Chomnab Ho

対話カフェ～みんなで話そう！多文化共生 ―第2回・第3回報告―

今回の対話カフェシリーズ（全3回）を準備する段階から、川崎でのヘイトスピーチの実態と問題を、参加者に知ってもらうことは、大事な課題でした。その点で、第2回・第3回に、在日コリアン3世の余泰順（ヨ・テスン）さん（神奈川ゆめ社会福祉財団 事務局長）に、ゲストスピーカーとして来ていただき、マイノリティの当事者として話をしていただけたことは、大きな成果でした。

第2回（2/21）では、多摩川の河川敷に形成された在日コリアン居住区（幸区戸手四丁目）での泰順さんの子ども時代の暮らしを中心に、話していただきました。その居住区（現在は立ち退きが終わりすでに更地）では、悪い人もいたし、喧嘩もあったりしたものの、住民同士がお互いを助け合うつながりがしっかりとあり、そのため、障害を持った人や、経済的に貧しい母子家庭など在日コリアンではない人も、この居住区を頼ってやってきたそうです。一方、当時の小学校では、在日コリアンの子どもたちへの差別があり、この居住区から通う子の多くは、自分がどこに住んでいるのかを隠そうとしたとのこと。泰順さんにとっては、社会に出てからの就職差別が大きな困難だったそうで、自分の本名・出自をそのまま認めてくれる職場に出会えたことが、自分の人生においてとても大きなことだったと話されていました。そんな泰順さんがヒシヒシと感じてきたのが、2000年代になってからの、在日コリアンへの差別意識の高まりでした。

第3回（3/24）では、川崎で実際に行われたヘイトデモについて、ニュース動画を観ました。そして、泰順さんからは、「ヘイト暴力のピラミッド」についての説明がありました。様々な「偏見」が批判されないまま蔓延すると、それが「公然たる差別」の温床となり、それらの差別が蔓延すると、マイノリティへの暴力の温床となる、という考え方です。

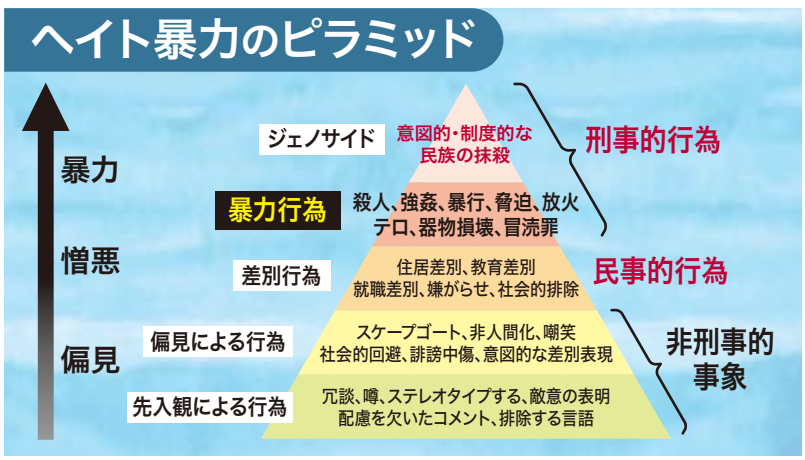
その後、参加者の皆さんにグループに分かれてもらい、「なぜ、ヘイトスピーチがうまれてきたのか」「ヘイトスピーチをなくしていくために、私たちになにができるのか」等について、話し合ってもらいました。その際に、ドイツの子どもたちがナチスによるユダヤ人虐殺をどのように学んでいるかを、参考にしました。

在日コリアン居住区の地図を見ながら説明を聞く

話し合いの中では、「私たちの親やその上の世代は、日本が韓国を併合支配した歴史があるために、在日コリアンの人たちを低く見る差別意識を持ち、続く世代にそれが引き継がれているのではないか」「学校教育の場で、歴史問題を人権や差別の問題と結びつけながら学ぶということをしてこなかった」「今の子どもたちは、親世代よりも人権のことを学んでいるので、親世代が子どもに植え付けることをしなければ、差別意識を持たないのではないか」などの意見がありました。

講座終了後のアンケートでは、「ヘイトクライムの生々しい状況を知り、なぜ、どうしたら良いか、を考えることができて良かったです。こういった時間や場所を少しずつ作っていくことが小さな大事な前進だと思います」「ヘイトクライムについて、歴史をまとめて学ぶことができました。知らないことが多かったことも痛感しました。参加できてよかったです。多くの人に知ってほしい内容だと思いました」など、感想をいただきました。

（多文化共生の地域づくりチーム　山田 孝志）



2022年度は、3回シリーズで、「多文化共生フィールドワーク」を実施します。対話カフェで話題となった場所を訪れ、関係者に話を聞くことで、さらに理解を深め、今後、地域の人たちが主体的に活動するきっかけとなることを目指します。

①幸区戸手　　戸手教会　5/17（火）
②川崎区桜本　川崎朝鮮初級学校　6/1（水）
③川崎区桜本　ふれあい館　6/20（月）
各回参加費500円

ウクライナへの軍事侵攻に反対する声明文

地球の木では、2月24日のロシアのウクライナへの軍事侵攻に反対する声明を以下のようにホームページやメールマガジン（Asian Wind）で発信しました。

「地球の木は、いかなる武力行使にも反対し、平和を求める人々と連帯します」

特定非営利活動法人地球の木（以下、地球の木）は、今日のウクライナ情勢を深く憂慮し、いかなる理由があろうともロシア連邦によるウクライナへの武力行使に強く反対するとともに、ウクライナの市民と共にあることを表明します。

「私たちは、国境を越えて市民が協力し合い、平和・人権・環境を守るために1991 年 7 月 グローバル市民基金「地球の木」を設立し、日本と最も深い関係にあるアジアを中心に国際協力活動を行なって参りました」（設立趣意書より抜粋）ここに記されている通り、地球の木は設立以来、地球上すべての人の平和を希求し共に生きることを願ってやみません。

紛争や人道危機は、ウクライナに限らず、今日もミャンマー、アフガニスタン、シリアをはじめ世界各地で起きており、多くの難民が行き場を失っています。

地球の木は、世界中で尊い命がこれ以上失われぬよう、対話と交渉による平和的解決が図られることを強く望みます。

2022年3月25日

特定非営利活動法人 地球の木　理事長　磯野 昌子

今まさに「お買い物で国際協力！」

地球の木「幸せわかちあいクラフト」デポー展示会

2022年度も生活クラブのお店「デポー」でフェアトレード販売会や活動紹介を行います。カンボジアやラオスの「幸せわかちあいクラフト」の生産者は、ロックダウンによる運輸制限、観光客および販売機会減少で非常に苦しい状況が続いていますが、クラフトのデポー販売や共同購入を続けていることで、現地生産者から感謝と喜びの声が届いています。2022年度は、地球の木クラフト販売ボランティアのいる5つのデポー（東戸塚、東寺尾、ひらつか、つなしま、南林間）限定で販売を行います。

デポー展示会　●6月25日㊏　東戸塚デポー

活動日誌（3月～5月抜粋）

3月

19日　第９回定例理事会
22日　デポー展示会（東戸塚）
24日　多文化共生 対話カフェ（第３回）

4月

16日　第10回定例理事会
25日　期末監査
27日　第３回臨時理事会

5月

17日　多文化共生フィールドワーク（第１回）
24日　デポー展示会（東寺尾）
24日　第11回定例理事会
28日　第23回通常総会

編集後記

◆様々な憶測が飛び交ったロシア戦勝記念日。独ソ戦争で戦死した家族の遺影を掲げた人々が誇らしげに行進する『不滅の連帯』パレードを見て考えた。この戦争が終わった後も、遺族はプーチンの妄想のために命を落とした息子や夫を誇りに思うだろうか…。捨て駒のように使われたロシア軍兵士たちを。（K・N）

特定非営利活動法人 地球の木 EARTH TREE